西尾維新文庫

零崎人識の人間関係

無桐伊織との関係

西尾維新

NISIOISIN

Illustration take

講

講談社文庫

零崎人識の人間関係

無桐伊織との関係

西尾維新

講談社

|著者| 西尾維新　1981年生まれ。2002年、『クビキリサイクル』にて第23回メフィスト賞を受賞、「京都の二十歳」としてデビューする。

零崎人識の人間関係　無桐伊織との関係
西尾維新
© NISIO ISIN 2014

講談社文庫
定価はカバーに
表示してあります

2014年10月15日第1刷発行

発行者——鈴木　哲
発行所——株式会社　講談社
東京都文京区音羽2-12-21　〒112-8001
電話　出版部（03）5395-3510
　　販売部（03）5395-5817
　　業務部（03）5395-3615
Printed in Japan

デザイン—菊地信義
本文データ制作—講談社デジタル製作部
印刷———豊国印刷株式会社
製本———株式会社国宝社

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは講談社文庫出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-277937-1

第零章　「まえおき」……7
第一章　「(略)」……25
第二章　「(略)」……61
第三章　「(略)」……97
第四章　「(略)」……147
第五章　「(略)」……177
第六章　「(略)」……221
第七章　「(略)」……253
第八章　「(略)」……299
最終章　「おしまい」……365

講談社文庫

零崎人識の人間関係

無桐伊織との関係

西尾維新

講談社

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

零崎人識の人間関係

無桐伊織との関係

第零章　「まえおき」……7
第一章　「(略)」……25
第二章　「(略)」……61
第三章　「(略)」……97
第四章　「(略)」……147
第五章　「(略)」……177
第六章　「(略)」……221
第七章　「(略)」……253
第八章　「(略)」……299
最終章　「おしまい」……365

登場人物紹介

零崎人識（ぜろざき・ひとしき）――殺人鬼

無桐伊織（むとう・いおり）――殺人鬼

石凪萌太（いしなぎ・もえた）――死神

闇口崩子（やみくち・ほうこ）――美少女

六何我樹丸（りっか・がしゅまる）――生涯無敗

闇口憑依（やみくち・ひょうい）――暗殺者

石凪砥石（いしなぎ・といし）――死神

哀川潤（あいかわ・じゅん）――人類最強

想影真心（おもかげ・まこころ）――人類最終

つまりハッター家一族は、容貌が瓜ふたつと似かよっていたばかりか、風変りな性格までがそっくりだったのだ。陰気くさい性質のくせに、底ぬけさわぎが大好きで、万事、行動が常軌を逸している。そうした傾向のトップをいくのは、とりわけて母親のハッター夫人だった。子供たち三人とも、所業については悪評ふんぷんたるものがあったが、それでも母親のそれにくらべれば、ものの数ともいえぬくらいであった。

彼女自身の娘時代は、さすがの末娘ジルも顔負けするほどの無軌道ぶりだった。中年期をすぎると、こんどはそれが、ボルジア家の女傑も顔負けするほどの辣腕ぶりで、取引社会に進出していった。その意志をおしすすめる強引さと、その卓抜した社交的才腕の前には、いかなる妨害工作も効果がなかった。複雑で危険率の多い投機市場操作も、機敏にして火のように烈しい彼女の賭博本能にとっては、なんの苦もない仕事だった。

(THE TRAGEDY OF Y by Ellery Queen/宇野利泰・訳)

第四章

「まえおき」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

◆　◆

「ところでよ――美少年こと萌太くん。石凪っつーのは死神の家系だったよな？　だから『殺し名』の人外連中の中において、唯一デスサイスで武装してるって話だったとこのあたしは記憶してんだが、しかしそれにしちゃあ美少年、お前は見たところ手ぶらもぶらぶら、徒手空拳じゃん。それって何で？」

哀川潤は。

不意に、とりたててこれといった前置きもなく――石凪萌太に向けて、そんな問いを投げかけた。

はっきり言ってそんな状況ではない。

場所は名門お嬢様学園に偽装した傭兵養成施設、つまりはご存知、今となってはすっかりお馴染みの澄百合学園――とは言え、この会話が交わされている時点より数ヵ月前に澄百合学園は廃校になっており、何を隠そう、そもそもこの施設を廃校に追い込んだのが他ならぬ哀川潤なのだが――その廊下である。

人類最強の請負人、ワインレッドのスーツに身を包んだ長身赤毛の女性――哀川潤と、そして、上下オールインワンの緑色のツナギに身を包んだ、涼しげな顔をした垂れ

目の少年――もとい美少年、石凪萌太。
二人が足並みを揃えて、歩いているのだった。
異色の取り合わせではある。
もっとも、そもそも二人は最初から二人だったわけでは勿論なく、澄百合学園施設内に確固たる目的を持って侵入した時点では、その人数は四人だったのだが――『敵方』の一人である一里塚木の実の空間製作なる、説明不能にして破格の技術によって、二手に分断されてしまったのだ。
その空間製作自体は、それ単体で見るなら、哀川潤にしてみれば避けようと思って避けられない攻撃ではなかったのだろうし、また、石凪萌太に至っては、それをいわゆる攻撃とさえ認識していない。
あちらの二人とは。
こちらの二人は――立っているステージが違うのだ。
それは実戦を知っているというだけの意味ではなく――である。
空間製作者・一里塚木の実がどこまで計画的だったのかはこの時点においては果たして定かではないけれど、そういった意味合いにおいては、まさしく分断されるべくして分断された、そういう組み合わせ、グループ分けだったと言っていい。
「僕にしてみれば、崩子といー兄を二人きりにしてあげたいという気持ちもありました

けれどね。ひょっとするとこれがもう、最後になるのかもしれないのですから」

「あ？　何言ってんだ？」

自分からの質問に答えず、そんなわけのわからないことを呟く萌太に対し、哀川潤は首を傾げる。哀川潤の周囲には思いのほかマイペースな傾向を持つ人間が多いのだけれど、しかしこの石凪萌太もそういう連中に負けず劣らずのキャラクター性というわけらしい。

端からそんなことを気にする哀川潤でもないが。

だが、その世界では『死色の真紅』として恐れられる哀川潤に対して、ここまで物怖じしない『殺し名』というのも珍しい。

「いえいえ――独白ですよ。ただの普通の、何ということのない独白です」

いちいち説明する気もないようで、萌太は肩を竦めた――およそ十五歳の人間がするような動作ではないのだが、それは彼のこれまでの半生を思えば、似合いも似合ったりといったところである。

「それで――何でしたっけ？　ああ。デスサイスの件でしたね。それはまあ、何と言うか……少し込み入った話になるんですけれど」

「込み入った話か。そりゃ是非聞きたいねえ」

くくく、と哀川潤は笑う。

大事揉め事厄介事、全部まとめて愛してるといった感じの楽しげな表情で、そこだけ見ればただの野次馬である。

「別に他人様に語って聞かせるようなことじゃないんですけれどね――ただの家庭の事情という奴ですし」

「家庭の事情か。ますます興味がある――こいつはまるでちっとも韜晦じゃなく、な。そもそも自己紹介された最初からあたしは引っかかっちゃいるんだよ。何で『石凪調査室』と『闇口衆』が兄妹なんだ？　腹違いの兄妹だっつってたけど、そんな腹違いって有り得るのか？」

「訊き辛いことを平気で訊いてきますね――哀川さん。ああ、いえ――潤さん、と呼ぶべきなんでしたっけ。苗字で呼ぶ者は敵なんですよね」

「……さあて」

哀川潤は。

うっすらと目を細める。

「どうだろうな――萌太くん。実のところあたしには、お前が敵か味方かは、案外まだ定まっていないようにも思えるんだが」

「味方ですよ。僕は全女性の味方です」

そんな風に嘯く萌太。

真剣味は欠片(かけら)もない。
哀川潤としては少なからず凄(すご)んでみせたつもりだったのだろうが、しかし萌太のほうはどこ吹く風だった。
マイペースである以上に。
まるで柳のような少年である。
裏を返せば、それはたとえば石丸小唄(いしまるこうた)が根尾古新(ねおふるあら)を苦手としているように――哀川潤にとって石凪萌太は、比較的鬼門の位置に近いタイプの性格であるとも言える。
少なくとも、哀川潤の位置よりは。
これから立ち向かおうとしている『敵方』の首領――人類最悪の位置に近い精神性だ。
敵か味方か。
定まらない。
判然としない。
簡単に――反転する。
それでも哀川潤が萌太と二人でこうして移動することをよしとしている理由があるとすれば、それでも最低限、全女性とは言わないまでも、彼が妹の味方であることだけは確かだと、唯一その点だけは判断できるからなのだろう。

石凪萌太の妹。
即ち――崩子。
闇口崩子。
向こう側にグループ分けされたうちの一人である。
「まあ、確かに先程いー兄にも説明した通り、石凪調査室の人間っていうのは死神なんですけれど、けれど僕は結構な変り種でしてね」
「僕は？　崩子ちゃんのほうは違うってのか？」
「崩子は闇口としてはむしろ真っ当ですよ。家出は僕が唆したみたいなものですし――そうですねえ、潤さん。ここから先のことは、できればいー兄には話さないでくださいね？」
嫌われたくありませんからね。
と、萌太は一応、そんな風な前置きをした。
その前置きの効果がどれほどあるものなのか、それは言った萌太本人もさほど期待していたわけではないのだろうけれど、
「ああ、わかった。請け負うよ」
と、哀川潤はそう頷いた。
如何にも気安い、簡単そうな台詞ではあるが――人類最強の請負人である哀川潤が言

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com